



ごめんねチロ

「お母^{かあ}さん、犬をかってもいい？」

動物が好^すきなゆうとは、前から犬をかってみたかったのだ。

「動物をかうことは大^{たい}変^{へん}なことなんだよ。ちゃんとお世話ができるの？」

「うん。しっかりお世話をするよ。だいじょうぶだよ。」

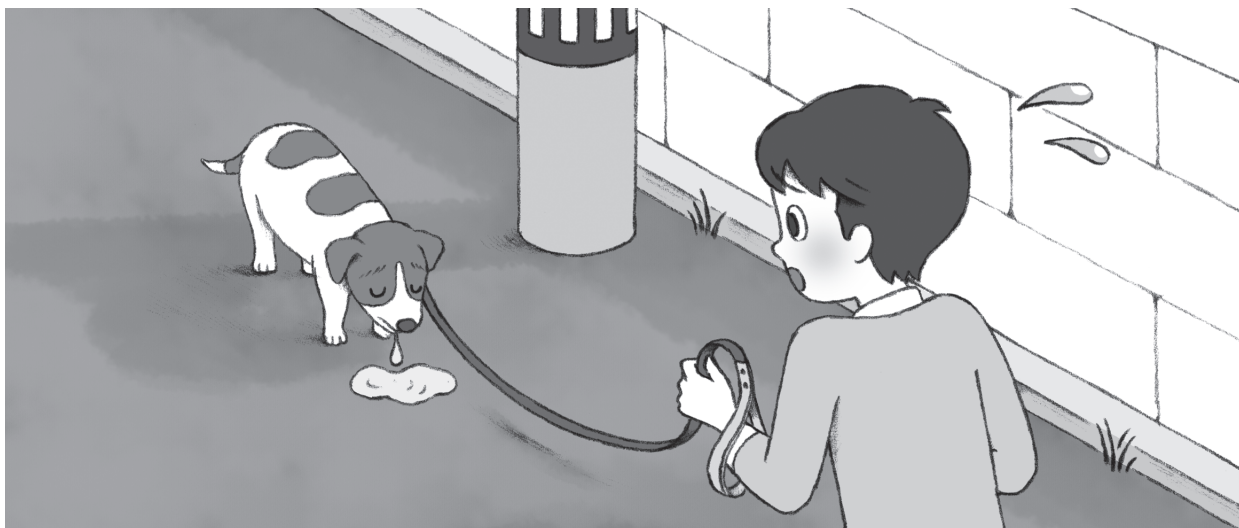
ゆうとの真けんな目を見てお母^{かあ}さんは言った。

「分かったわ。きちんとせきにんをもってお世話をするのよ。」

しばらくして、ゆうとの家に一ぴきのかわいらしい子犬がやってきた。名前はチロと名付^づけた。

ゆうとは、お母^{かあ}さんと約束^{やくそく}したとおり、毎日毎日、しっかりとチロのお世話をした。

ある日のことだった。



ゆうとは、チロといっしょに友達ともだちの待つ公園に向かっていた。

ちようど公園が見えてきたときのことだった。とつぜん、チロが立ち止まり、さつき食べたものをはいてしまったのだ。

よく見ると、食べ物といっしょに黄色いえきもまざっている。ゆうとは、

（何か変へんなものを食べたのかな？ だいじょうぶかな？）

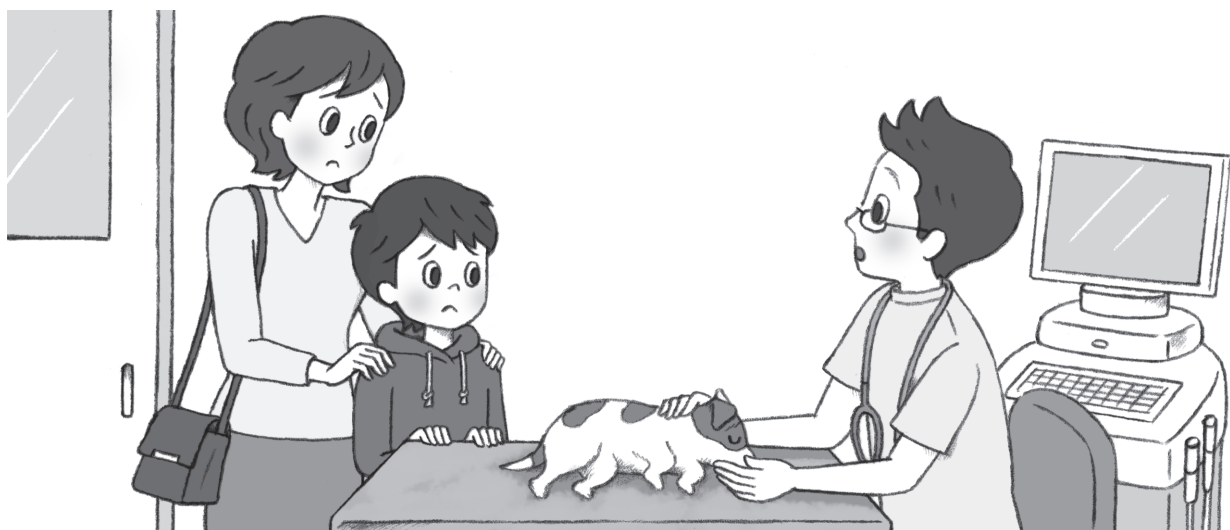
と、少し心配になったが、友達ともだちと遊びたい気持ち強く、そのまま公園へと急いで向かってしまった。

ゆうとは、チロがはいたことをすっかりわすれて、友達ともだちとむちゆうになって遊んだ。

帰るとちゆう、チロのようすを見てみたが、いつもと変かわらないチロを見て安心した。

それから三日後のことだった。

「最近さいきん、なんだかチロが元気ないね。何か変かわったことはなかった？」と、お母かあさんがゆうとに話しかけた。



ゆうとは、一しゅんどキツとして、チロがはいたあの日のことを思い出していた。たしかに、あの日からチロの元気がなくなっているような気がしてきた。

でも、お母^{かあ}さんに「あの日」のことを言えなかった。

一週間後、チロの体調が急変^{きゅうへん}した。

ひどいせきをしたり、食べ物をもどしたりすることが多くなって、ゆうとお母^{かあ}さんは、急いで近くの動物病院へチロを連れていった。病院の先生がゆうとに言った。

「ずいぶん前から、体調が悪かったのではないですか？ 今日^{きょう}は注しやを打っておきますので、ようすをみてください。」

ゆうとは、不安^{ふあん}をかかえたまま、家に帰った。

その夜、チロはますます元気がなくなっていくた。ほとんど動くことができず、食べ物も自分で食べることができなくなっていました。

ゆうとは、チロの大好き^{だいすき}なおやつやスープをチロの口に何度も運ん



？ 考えよう

だが、もう飲みこむこともできなくなってしまった。

ゆうとは、心の中で何度もさげんだ。

（お願いだから、がんばって食べてチロ！ がんばれチロ！）

ゆうとの足はふるえていた。

なんだかとてもこわくなり、どうしていいかわからなくなった。

それでも、ゆうとは、チロに声をかけたり、体をやさしくさすったりすることを一ばんじゅう続けた。

しかし、とうとうチロは動かなくなってしまった。

ゆうとは、冷たくなったチロに向かって、

「ごめんね。ごめんね。」

と、小さな声でつぶやいた。

ゆうとは、あふれ出てくるなみだを止めることができなかった。

（文 宮崎県小学校教育研究会道徳部会／絵 クリエイティブ・ノア）

① 冷たくなったチロを見て、ゆうとはどんな気持ちだったのでしょうか。

② どんなときに、命の大切さを感じますか。